



循環型農業に挑む地域のリーダー	2
京都のニューファーマー 春田晃宏さん (長岡京市)	
守りの集落営農から攻めの地域営農へ	4
チャレンジ農業法人 農事組合法人 木喰の郷もろはた (南丹市八木町)	
異業種の経営者に学ぶ ー私の経営論ー	6
生田泰宏さん (生田産機工業株式会社)	
頑張ってます、われら新規就農者!	7
原田 健一さん (亀岡市千歳町)	
農業経営者へのアドバイス	8
「人を受け入れるにあたって」	
農業法人ニュース	8



ソルゴー障壁栽培に取り組む晃宏さん

循環型農業に挑む地域のリーダー

— 自然界の仕組み生かし、環境負荷を低減 —



長岡京市

はるた
春田
(40歳)

あきひろ
晃宏さん

長岡京市特産のタケノコ、千両ナス、トマトなどを生産している春田さんは、筋入りの「エコファーマー」だ。自然のリサイクルに心を砕く一方、害虫防止のための天敵利用や黄色蛍光灯などの新技術を率先して導入。「農業は自分の可能性が試せる世界」と手応えを感じている。

伝統栽培でタケノコを育てる

「タケノコの収穫はたった1カ月間だけど、年中手入れをしないといいタケノコは採れないんですよ」。春田さんは竹林一面の“敷きわら”作業に余念がない。その稲わらの上に、ふわふわの布団をかけるように赤土を重ねていく。高品質の色白で軟らかな「京たけのこ」を生産するには欠かせない晩秋の作業だ。

乙訓地域は中国伝来の孟宗竹が最初に移植された地といわれ、いまでも伝統栽培が受け継がれている。収穫時に次の親竹を選び、親竹の先端(芯)止め、古竹の伐採、そして敷



きわら、土入れ、肥料やり…。竹林というより「タケノコをつくる畑」といったほうがぴったりする。

収穫は土入れた表面の小さなひび割れを見つけ、「ホリ」という鍬のような農具で傷つけないように掘り起こす。「タケノコの先を見てどこにホリを当てるかがコツ」（春田さん）とか。朝掘りのタケノコは、自前の「春田農園」直売所で販売し、宅配は全国一円に及ぶ。

天敵・黄色蛍光灯を利用

春田さんの家は、両親の忠男さん(65)と妙子さん(62)でタケノコ、水稲などを栽培してきた。大学卒業後、京都市内の自動車販売会社に勤めたが、8年前に母が体調を崩して、働き手が父一人になり、春田さんは「このままサラリーマンを続けてもいいのか」と悩んだ末、最終的に自分で就農の道を決めた。

「付加価値をつける農業をやってみよう」。就農にあたって春田さんはこう決意した。環境にやさしい栽培方法を求めて、さっそく同年代の仲間と「長岡京市有機農法研究会」を組織。まず取り組んだのが、露地栽培の千両ナスの害虫防除だ。

その1つは、「ソルゴー障壁栽培」。アブラムシの発生を抑えるため、ナス畑の周りにイネ科の飼料作物・ソルゴーを植える。すると、ソルゴーにアブラムシがつき、それを食べるにテントウムシなどの天敵がやってきて、そのときナス畑にも入って他の害虫も食べてくれる。加えて、トウモロコシのように伸びたソルゴーは防風ネットにもなるというわけだ。

もう1つは、ナスに産卵するオオタバコガの被害を防ぐための黄色蛍光灯の設置。ガは黄色の光が当たると活動を停止するという性質を利用し、6月～10月の間、10aのナス畑に12基の蛍光灯を点灯。ナスのほかに、トマトを栽培しているハウス内でも利用している。

これらの組み合わせで、農薬の使用量を慣行の3分の1以下に減らすことができ、平成15年、春田農園は

府エコファーマーの認定を受けた。伝統のタケノコ栽培やソルゴー障壁、黄色蛍光灯栽培の試みは、国内をはじめ海外からの視察も多い。

間伐竹も有機肥料に

栽培方法の基本には、土づくりがあることは言うまでもない。

春田さんは作付け前には必ず土壌診断を行い、分析結果を見て肥料リストを作成。土づくりには府内産の有機質堆肥や、間伐した竹を原料とした竹炭を利用、雨で流れないように液肥を直接土中に施肥するなど、地域の資源を無駄にしない。「府内循環型農業に貢献したい」というのが春田さんのモットーだ。

さらに地元各市町は合同で、伐採竹を竹炭だけでなく、チップにして土壌改良の堆肥に活用していくことも検討中だ。春田農園は新技術を積極的に導入して試験栽培し、そのデータを関係機関に提供している。

こうした環境にやさしい栽培技術を背景に、有機農法の仲間2人と一緒にブランド化をめざしているのがゴルフボール大のミディトマト。この地にゆかりのある細川ガラシャにちなんで「ガラシャの瞳」と命名、商標登録もした。どれも糖度「7」以上で、フルーツ感覚で食べられると評判は上々だ。



天敵利用など減農薬でトマト（ガラシャの瞳）を育てる。

直売できずな深める

「街の八百屋さんのつもりで農業をやっている」と春田さん。春はタケノコ、夏から秋にかけては

ナス、トマト、キュウリ、冬はハクサイ、大根、カブ、葉物類のほか、自家菜園のハウレンソウ、コマツナ、みず菜、花菜、ミカン、カキなど、年間栽培品目は「20」を超える。



買い物客で賑わう春田農園直売所

千両ナスと「ガラシャの瞳」の一部を市場出荷している以外は、すべて直売所で販売している。毎朝9時開店、健康を回復した母とパートの主婦が野菜を並べ、店番を担当する。ホームページによる情報発信にも熱心で、全国のお客さんにタケノコを販売、「今後は、季節野菜を届けるのが目標」という。

春田さんが住む同市粟生地区では農家だけでなく住民が協力し合い、地域の自然や景観保全に取り組んでおり、父の忠男さんはその「粟生地域環境保全組合」の代表を務める。「消費者に農薬を減らす努力を知ってもらえれば、よりきずなは深まるはず」。春田さんはそんな青写真を描いている。

プロフィール

昭和44年 長岡京市生まれ。
京都学園大学経済学部卒業後、自動車販売会社勤務を経て、平成13年就農。同14年認定農業者。同15年府エコファーマーに認定。同20年度府若手農林漁業者表彰。

経営状況

■従事者
春田晃宏さん
両親の忠男さん・妙子さん
*パート1名(直売所)

■経営内容

竹林50a：京たけのこ
ハウス2棟(無加温・10a)
：トマト(桃太郎・ミディトマト)年2作
▽露地野菜：千両ナス10a、冬野菜40a(ハクサイ、大根、カブ、ブロッコリーなど)等
水稲：50a



農業法人のページ

農事組合法人 ^{もくじき}木喰の郷もろはた

南丹市八木町

守りの集落営農から 攻めの地域営農へ

—“水稲依存”から脱却、 持続可能な経営めざす—

- 資本金/917万円(出資者48名)
- 経営内容/経営面積21ha
水稲12ha 小麦7ha 小豆6ha 白大豆1ha 紫ずきん50a
花菜40a 伏見とうがらし10a 小菊10a トウモロコシ5a
- 役員/代表理事 明田 卓さん 他理事4名、監事2名
- 労働力/作業部会18名(うち女性14名)
オペレーター部会20名
- 沿革/昭和59年 諸畑農家組合規約を制定(集団転作の取り組み開始)
平成5年 諸畑地区圃場整備協議会を設立
15年 地区内のほ場整備に着工
19年 ほ場整備完了
20年 農事センター完成、大型機械の導入
21年1月 農事組合法人を設立



代表理事の明田卓さん

農村の集落事情は「高齢化」が冠言葉に使われるように、どこも同じだ。しかし、現状に甘んじることなく自ら行動を起こすかどうかで、集落の雰囲気は違ってくる。生産調整への対応を契機に農家組合を立ち上げ、集落営農の取り組みを開始して四半世紀。平成21年1月、諸畑地区は農業法人「(農)木喰の郷もろはた」を設立し、農地を守るだけでなく、地域活性化への新しい一歩を踏み出した。

■「わが田」から「われらの田」に

山際まで水田が広がる南丹市八木町の諸畑地区。「(農)木喰の郷もろはた」の代表理事、明田卓^{あけ たかし}さん(68)は、広々とした耕地を指さした。「わが田」から「われらの田」になったんです。

同地区は、JR八木駅から車で北へ約15分、水稲単作が大半の兼業地帯だ。これには田んぼは粘土質で米づくりに適していること、「山里でもなければ、都市近郊でもない」(明田さん)という事情もある。これまでは個々の農家が大きな機械投資を強いられ、兼業で得た収入で農業を維持してきた。その兼業農家の集合体である同法人が、これからは地域の農業を担っていく。

「この地には、昔からの共同意識がいまなお受け継がれ、消防団などの行事には若い人も帰ってくる」(明田さん)というのが諸畑の自慢だ。共(協)同を重んじる気風は消費者との交流にも及ぶ。平成20年からは、生産者と消費者が手を結ぶ「南丹おいしい食の応援隊」がこの地を訪れ、黒大豆のエダマメ「紫ずきん」の定植、収穫体験の交流客でにぎわっている。



(農)木喰の郷もろはたを支えるスタッフのみなさん

■ほ場整備の実現で地域営農へ

「木喰の郷もろはた」は設立されてまだ1年。しかし、法人化までには四半世紀の前史がある。

諸畑地区の5つの農家組合ごとに規約をつくり、水稻の集団転作を始めたのは昭和59年のこと。その後、どうせやるなら地区の全集落で取り組もうという機運が高まり、地区内を流れる“天井川”の河川改修とは場整備をめざして平成5年、諸畑地区圃場整備協議会が発足。府に対して事業化への要請活動に取り組み、ようやく同11年に諸畑地区を含む周辺4地区を対象としたほ場整備事業の導入が採択された。

このうち諸畑地区内は、同15年から5年かけてほ場整備を実施。1区画1haのほ場も誕生し、併せて農地600筆を150筆に集約した。

一方、同18年から米の集出荷を農家組合に一本化し、同20年には地域農業の拠点となる農事センターも完成し、大型機械を導入して本格的な集落営農に踏み切った。この間、先進地の視察や研修会を重ね、法人化準備委員会を立ち上げてからわずか半年で法人の設立にこぎつけた。「農家組合という下地があり、住民に“地域を守りたい”という気持ちが強くあったので、話し合いは順調に進んだ」と、総務担当の竹井勝さん(66)は振り返る。

法人名の名称「木喰の郷」の由来は、江戸後期に全国を巡っていた木喰上人がこの地の寺に滞在、微笑みを浮かべた木喰仏像を彫り、いまも22体が寺に安置されていることにちなんだもの。



ほ場整備で新しく生まれ変わった農地！

■多角化戦略へ女性の参画促す

法人の経営面積は現時点で21ha、地区全体の42haのちょうど半分にあたる。

これまでは水稻を基幹とし、小麦、小豆(大豆)による2年3作の輪作体系だった。しかし、「従来どおりの転作作物ではこれからの経営は成り立ちにくい」(明田さん)と判断、法人設立を契機に麦、豆類といった転作の“定番”に加え、新規作目の導入を目標に掲げた。

平成21年の作付品目は、水稻(日本晴・ヒノヒカリ)、小麦、白大豆、紫ずきん、花菜、伏見とうがらし、小菊、トウモロコシ。前年まで水稻以外の作目が小麦、小豆、白大豆だったことからすれば、大きな変化だ。

さらに、もう一つの経営の柱として期待しているのが、女性部を中心とした直売所の復活と、味噌・漬物などの農産加工部門。地区内では10年前、農産物直売所「木喰山里のお店」を設けて有機野菜を毎週販売していたが、



法人化を契機に新しい作物に挑戦！ 伏見とうがらしの選別作業

ほ場整備に伴って自家菜園が減り、3年前から休業していた。今後は、長年活動を続けている加工グループとも連携していく計画だ。明田さんも竹井さんも「諸畑の元気には、女性の元気が不可欠」と口をそろえる。

■オペレーターは後継者世代

諸畑地区も、担い手の高齢化という事情は変わらない。だが、同地区が異なるのは、後継者世代の多くが同居あるいは目と鼻の先に住んでマイカー通勤しており、マンパワー不足に関してはあまり心配がないことだ。

以前は、30代の若い人たちが田んぼに出る姿を見ることはなかった。ところが、ほ場整備以降は若い人たちの目が農業に向けられるようになったという。「法人にとってはありがたいこと。うちの息子も5年前にUターンしてきて…」と、明田さんは顔をほころぼせる。

営農組織は、作業部会(18名)とオペレーター部会(20名)からなり、このうちオペレーター部会の中心メンバーはこうした後継者世代だ。

毎月末に定例の理事会を開いて作業スケジュールを決め、その翌日にオペレーター部会、さらに翌々日には作業部会を開いて翌月の作業ローテーションを組む。「人手はすべて地区内で調達」(竹井さん)しているが、若い人が参画するようになったのは、生産にかかわるプロセスが明確にされているからだろう。

■「集落営農とは地域活動」

集落営農の事業運営には、リーダーだけでなく、それを支える参謀役も欠かせない。代表理事の明田さんは元JA支店長、参謀役の竹井さんは京都市で区長を務めた地域の“名士”でもある。

竹井さんは「われわれは、経営体と地域の調整役の2つの役割を担っている」と話す。経営体としては「高齢化の進行で、法人への農地集積はこれから増えてくる」とみており、調整役としては「集落営農とは地域活動です。みんなでやっこそ、地域は生きてくる」という。

明田さんの口からも「ここに住んでよかったと思える地域にしたい。法人がその受け皿になって頑張らなければ…」との言葉が出る。法人は兼業農家の集合体だ。しかし、地区民の手づくりによる“専業農家”として地元の期待は大きい。

● 農業者年金の魅力 ●

農業者年金には

「認定農業者・青色申告者への保険料助成」や
「保険料全額控除」のメリットがあります

—— 詳しくは農業委員会におたずねください。 ——

私の経営論

一人との出会いが育んだ オンリーワン企業

生田産機工業株式会社（京都市伏見区）

代表取締役 ^{いくた やすひろ} 生田 泰宏さん

1961年 京都市生まれ（48歳）
84年 大阪学院大学経済学部卒業
（株）石田衡器製作所（現・イシダ）入社
90年 生田産機工業（株）入社
99年 代表取締役に就任
2002年 中国・蘇州に現地法人設立
06年 小型風力発電機を開発
07年 「京都中小企業技術大賞」受賞

この会社は私の祖父が1919年に京都・伏見で創業しました。主に蔵元の酒蔵設備を手がけていましたが、戦後、伸銅技術を持つ技師と出会い、伸銅品の生産設備の開発に着手。以来、半世紀以上にわたって大手伸銅メーカーに設備を納め、なかでも圧延工程で表面に付着する不純物を削り取る「面削装置」は国内シェア90%を誇っています。

◆既存のカラーを打ち破る

携帯電話やパソコンなどの電子部品に使われている銅箔は伸銅品からつくられています。面削技術は1955年に特許を取得しましたが、“より薄く、より小さく”という技術の進化はすさまじく、いまではミクロン単位の高精度は当たり前になってきました。

その面削装置には、表面を削るためのカッターと、そのカッターの刃を研ぐ研削盤が必要です。このうちカッターだけは工具メーカーから仕入れていましたが、9年前に自社開発に踏み切り、面削・カッター・研削をワンパッケージにして提供できる体制を整えました。これら3つの技術を1社で提供しているのは国内でも当社だけです。

もう一つ、既存のカラーを打ち破るということで、中国・蘇州に法人を設立しました。以前から中国人留学生とは交流があり、市場にも無限の可能性を感じていたことから進出を

決断、国際入札で、はるかに規模の大きい欧州勢を退けてきました。

また、面削だけでなく、その後工程の洗浄や銅表面の凹凸を平坦にする装置（レベラー）なども開発、取引先の課題に応える“ソリューション企業”をめざしています。

◆人材のネットワークを契機に

1997年、京都地球温暖化防止京都会議が開かれた年に、流体力学の博士号を持つ中国人エンジニアが入社してきました。これまで培ってきた技術や彼の専門を環境分野にも生かせないかと考え、仕事の合間を見つけて風力発電の実験機をつくって来ていました。

そんななか、インターンシップ（職場体験）で機械工学専攻の大学院生4人を受け入れる機会があり、共同製作でオリジナルの小型風力発電機を完成させたのです。

この取り組みが縁で東海大学の先生と知り合うことができ、やがて府による産学公連携の風力発電システムのプロジェクトが誕生することになりました。

今年、自然エネルギー発電装置を手がけるための別会社を立ち上げましたが、それは利益追求のためだけにやっているのではありません。社員の能力を環境分野にも生かすことが、次世代への大きな財産になるからです。

◆工場は人づくりの基地

何事もすべて人との出会いから始まるのかもしれませんが、モノづくりもまた人づくりだと思っています。「工場は人づくり」という精神は祖父の代から受け継がれてきました。

社員には「人間力」を高めるために、思いやりの心・感謝の心・自立の心の“3つの心”を育てるよう言っています。月曜日の「元気の出る朝礼」ではそれをテーマに、社員に交代で3分間スピーチをしてもらう。社員一人ひとりの個性を発見し、チャンスを提供するのが私の使命だと考えています。

人づくりを重視することで社会貢献したいと、10数年前から地元の工業高校生らのインターンシップを受け入れています。町工場こそ人づくりの基地でありたい。それが地域への恩返しにもなるのではないのでしょうか。（談）



頑 張 っ て ま す

われら新規就農者！

自然農法で 米づくり農家へ

亀岡市千歳町：原田 健一さん

◆自然農法へのこだわり

「自然の摂理にしたがう」「食という字は人を良くすると書く」、自然農法の基本を話す原田さんは自信に満ちている。最近、『自然農法の水稲栽培』という本を発刊した。

健康な土には健康な作物が育ち、健康な作物は美味しく、病害虫にも冒されにくいし、雑草もおとなしくなる。まず、土を育てることに精進するのみ。この農法を亀岡市千歳町で確かめつつ、米づくりに踏み出した原田さん。

◆経験を現場で活かす

原田さんは、財団法人自然農法国際研究開発センターに平成9年から勤務し、全国各地で水稲栽培の研究普及に携わってきた自然農法の専門家。その財団を平成19年12月に退社し、これまでの技術を活かし誇りが持てる仕事として、自然農法で米づくりを実践することを決意する。

同20年には農地を求めて京都のジョブカフェ等を訪れる。その後、南丹広域振興局の方との縁を経て、亀岡地域担い手育成総合支援協議会の調整で当地の農地を紹介されて入植。



この秋は研究者から農家になって初の稲刈り



◆今年の米づくりを終えて

「1年目だったので準備が整わず、田植えも大幅に遅れました」と原田さん。今年は、収量も少なかったものの、土を育てながら、自然農法による米作りを実践してきたという。

「今年は、研究者から農家になるステップを一段歩き始めたところです」と明るい笑顔で話す原田さん。水田の規模は、今年の1.4haから5haを目標に、年々面積を増やしていきたいという。

◆農業の原点を追う

農の現場は命との関わりが深い。それだけに短絡的に効率化してはいけないところがある。「除草剤の使用は、生命の根本を完全に断ち切ってしまう。本当に大切なものは何か、その感覚を届けられる農家になりたい」と話す原田さん。

原田さんは、日本人の感性は稲作との関わりの中で培われてきたもので、田んぼの有り様が変われば、人の心に変化が起きても不思議ではないという。新しい農の文化が創造されることを期待して、自然農法に情熱をかける。原田さんの姿勢に農業の原点をみた。

<原田 健一さんのプロフィール>

- 年齢／41歳
- 出身地／京都市
- 経営の概要／●水田1.4ha（水稲は自然農法による栽培）
●畑 0.3ha（畑の野菜は自家用兼試験栽培用）
- 好きな言葉／東山魁夷の言葉
「描くことは、祈ることである、祈りには上手下手はない心がこもっているかどうかだけである」
- その他／原田健一著／『自然農法の水稲栽培』
～栽培のイメージーションとその立脚点～
出版社／レーヴック／星雲社



農業経営者へのアドバイス 「人を受け入れるにあたって」

京都府担い手育成総合支援協議会登録スペシャリスト 橋本 将詞



雇用の受け皿として農林業が注目されています。担い手不足に悩む農業界にとっては人材確保のチャンスですが、農業人として定着させなければ意味がありません。他産業からの就農希望者を受け入れるにあたって、雇う側はどのような意識をもって取り組むべきでしょうか。そもそも、「ヒト」は何のために働くのでしょうか。働く目的は大きく二つ。

一つ目は生活のため…ヒトは労働を提供する対価としてお金（賃金）を得ます。働く条件が不明確であれば、生活そのものに不安定さを感じ仕事に集中できません。雇う側とすれば、労働条件を明確にし、仕事に集中できる環境を整えることが必要です。農業において労働基準法の一部が適用除外となっているのは自然環境の影響を受けやすい等の特殊性によるものです。難しい点がありますが変形労働時間制の活用等工夫も必要になります。二つ目は、やりがい…仕事は人生の一部です。その人生の一部にやりがいを見出せないとなると仕事に対するモチベーションは下がります。

そこで、キーワードを3つ挙げると、「誇り」「面白さ」

そして「使命感」。「誇り」とは、従事する仕事（商品）を他人に自慢できること。農業でいえば、自分の作ったものに自信をもって消費者に食べてもらえること。「面白さ」とは、個性を活かす場を作ること。マニュアル化する部分と個人判断に委ねる部分のバランスをうまく保つこと。そして、「使命感」とは、一つ一つの作業の意味を理解してもらうこと。個々の作業を積み重ね、会社としての大きな目的に繋がっていることを示すことです。人は、衣食住が足り生活が安定すれば、自分自身の可能性を見出したいくなります。仕事の場でそれを提供できれば人材の定着に必ず繋がります。

実は、ここに掲げた3つのキーワードは、すべて「農業」にあてはまります。生産者である皆さんが日々携わっている農業には「誇り」「面白さ」そして「使命感」のすべてが備わっています。それを感じながら農作業をされているのではないのでしょうか。それを如何に就農希望者に感じてもらうか。雇う側の皆さんには、個々の事業はもちろん、地域を活性化させ、さらには農業人を育てるという大きな使命が期待されています。

農業法人 ニュース

全国セミナーに参画 ～見聞を広め、人脈を築く～



秋季セミナーの会場風景

(社)日本農業法人協会主催の全国セミナー「農業法人全国秋季セミナー2009 in 晴れの国おかやま」が11月19～20日に開かれ、京都府内の農業法人4社が参加しました。

「連携と交流で拓く農業経営」がテーマの今年は、地元で生産者をコーディネートしながら、量販店に新しい流通スタイルを提案している(有)漂流岡山の阿部社長が基調講演。「スーパーが過剰に存在し、熾烈な競争のなか、“安い”“新鮮”といった商品の特殊性は、もはや売りにはならない。量販店に販路を築くには、客を集める話題づくりができるかどうかポイントになる」として、その手法を披露。参加者らは経営のヒントを得ようと講演に聞き入っていました。

その後、開かれた交流会では参加者同士が情報交換を行うなど、中身の濃い2日間となりました。

編集局から

◆ある県の集落型農業法人の事務所で、農業法人や農家に対して炭入り堆肥を無償で提供している建設業者に出会った。堆肥はまだ試験中だが、建設重機で堆肥の散布も行っているそうだ。業者の堆肥づくりは、有機農家に、土づくりに

よって品物の価値（品質）が上がるかと教わったのが切っ掛け。目下、全国の有機農家を回り、堆肥づくりの情報を仕入れているそうだ。公共事業が少なくなる中で、農業分野に新たな事業を切り開こうとする姿勢に、企業の意欲をみた。

経営と農政がわかる

「全国農業新聞」

—お申込みは市町村農業委員会へ—

発行/2009年11月

発行者 京都府農業会議（京都府担い手育成総合支援協議会）

〒602-8054 京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2 京都府庁西別館内 TEL.075(441)3660(代)